Peter Krinks,

The Economy of the Philippines: Elites, Inequalities and Economic Restructuring.

London: Routledge, 2002, xiii＋262pp.

鈴木有理佳（すずきゆりか）

フィリピンは1986年と2001年に２度の政変を経験した。経済はそれぞれの政変前に低迷し，２つの政変の間にもクーデター未遂事件や電力危機，アジア通貨・経済危機などで停滞する時期があった。本書はこのように不安定ともいえるフィリピンの政治経済を理解し，その将来を展望するためには，フィリピンがこれまでたどってきた経済発展のあり方とその固有な特徴を知る必要がある，という問題意識から書かれたものである。

内容を紹介すると，著者はまず第１章でフィリピンの経済発展は地域や人々の間に貧富の格差をもたらす「不均等な発展」（uneven development）であったと述べている。そしてその背景を説明するにあたり，資本家，労働者，国家に焦点をあてるという本書の視角を提示している。そこで第２章では国家や経済エリートの出現と形成に加えて，独立後から現在にいたるまでの社会運動などを歴史的に概観する。ここで著者は，⑴植民地国家およびその後の独立国家の形成と国家政策，⑵生物物理学的環境（bio-physical environment），の２点がフィリピンにおける経済活動の変遷に大きく影響してきたと主張する。時代とともに資本蓄積の場が農産物および鉱物資源から輸入代替政策下における製造業，そして金融や流通などのサービス業へと移ってきたこと，またその過程において蓄積された富は都市部に集中するか外国に流出する傾向にあり，地域間格差が現れるようになったとも説明している。その地域間格差についてデータを用いて説明しているのが第３章である。特にマルコス政権崩壊後の経済について，産業構造や所得分配，教育の状況などを地域別に概観し，不平等さを強調している。

第４章から第６章までは農林水産業，鉱工業，サービス業についての叙述であり，本書の半分近くを占めている。著者はそれぞれの産業について，経済全体における位置づけと，1986年の民主化以降に進められてきた改革や現状，さらには現在抱えている問題などを概観している。第４章ではコメ，トウモロコシ，家畜および家禽，砂糖，ココナツ，コーヒーとカカオ，タバコ，アバカ，果物，パーム油，そして水産業に林業と幅広く，農地改革についても触れている。第５章では鉱業，エネルギー産業，衣料品，繊維，電気電子，食品加工，自動車，化学，鉄鋼産業をとりあげ，続いて第６章では金融，不動産，小売業，輸送，通信産業，そして海外出稼ぎ労働者についても説明している。

このように様々な産業を概観しつつ，著者はフィリピン経済の特徴として大手地場資本や外国資本による支配と，資本家が労働者に比べて優遇されているという実態をあらためて指摘する。経済基盤を確立した国内資本家は，蓄積した資本を再投資するのではなく，他産業へと多角化することで拡大してきた。その過程では政治的影響力を行使しながら有利な政策を引き出し，さらには労働者の賃金を押さえることで富を蓄積してきたともいう。そしてこの傾向は自由化が進む近年でも変わっておらず，特にサービス業への多角化が顕著であると述べている。

以上のような発展をとげてきたフィリピン経済だが，最後に変化の兆しがあることを指摘して本書は終わる。それは，⑴都市部における「中間層」の増加や組織化されたNGO，宗教団体，労働団体などの存在，⑵グローバル化による外圧と市場競争の激化，⑶専門的知識を持つ経営者の増加，である。これらの変化のゆくえは，今後，読者が観察することになる。

本書はそのほとんどを既存研究に依拠しつつ，フィリピン経済のあらゆる分野について幅広くとりあげている。そのためか，叙述の大半は政策内容と実情の説明で終わってしまっている印象を受ける。しかしながら，フィリピンの経済発展の特徴について広く知ることができるだろう。

（アジア経済研究所地域研究センター）